

第3回Green Forum (GF3)開催報告

安田, 章人
日本学術振興会 : 特別研究院 | 東京大学 : 特別研究院

<https://hdl.handle.net/2324/26679>

出版情報 : Wildlife Forum. 16 (2), pp.26-27, 2012-02-29. 「野生生物と社会」学会
バージョン :
権利関係 : (C) 「野生生物と社会」学会 2012



第3回 Green Forum (GF3) 開催報告

安田章人 (日本学術振興会特別研究員 PD / 東京大学特別研究員)

青年部会は、2011年5月14日・15日の二日間にわたって、第3回 Green Forum (GF3) を、東京・八王子セミナーハウスで開催した。Green Forum とは、学部生や大学院生、ポスドク、行政、民間企業、NPO、ボランティアなどの、いわゆる若手研究者・実践者を対象とした合宿形式の交流会である。こうした多様な人材の卵である若手にとって、研究や実践の交流、キャリアデザインの悩みなどをじっくり語り合う場は多くない。そこで、青

年部会では、若手研究者・実践者を対象として、1. 研究から実務、保全活動まで若手を中心とした情報交換やネットワークづくりの場を提供すること、2. 現場の実践報告を通して、問題解決に資する研究や実践活動、そして研究に限らない多様なキャリアデザインなどについての議論をかわすことの2点を目的として、第3回 Green Forum (GF3) を開催した。

一日目、二日目の両日を通して参加したのは、18名にのぼった。一日目、二日目のいずれかに参加したのは、8人となり、合計で26人が本企画に参加した。参加者は、学部生1年生から、修士課程、博士課程、社会人、行政関係者と多岐にわたった。また、メーリングリストなどによって積極的に広報をおこなった結果、参加者全体の3割(8人)が非学会員によって占められた。

一日目は、青年部会長の挨拶の後、まず参加者全員で自己紹介をおこなった。それは、一人あたり数分の口頭紹介をおこなうのではなく、各自の調査地の写真などを載せた自己紹介文を使って、一人あたり約10分かけておこなった。そこでは、院生や行政関係者からは各自の研究歴や、現在進めているプロジェクトの内容と悩みなどが紹介されたほか、学部生からは「先輩」に対して、「研究テーマをどのように決めたのか」という質問が出た。その後のポスターセッションでは、テーマを設定せず、自由に参加者の研究紹介をおこなうことで、学術的交流を図ることを目的とした。発表をおこなった方々の氏名、所属、タイトルは、以下の通りである。1. 中島正貴さん(総研大)「自然再生事業における boundary object の提案」、2. 藤岡悠一朗さん(京大・院)「サバンナの農地林とアグロダイバシティ：ナミビアにおける農牧民の樹木に対する保育的関与」、3. 李カリンさん(東大・院)「ため池の保全における多義的枠組みについて」―兵

庫県加古川市西神吉町富木地区のため池を事例に」、4. 谷川ももこさん(日大)「長崎県対馬における鳥類血液寄生虫原虫の感染状況」。タイトルとみてわかるように、研究分野、調査地域ともに多様となった。しかし、多(他)分野となったことにより、議論が活発になされなかったというよりはむしろ、学術的交流を目的とした企画であったために、基本的な事実確認から根本的な問いに至るまで、幅広い議論をおこなうことができた。

二日目は、コミュニケーションフォーラム「野生動物管理における現場との関わり」というテーマで、セッションをおこなった。このセッションでは、様々な国の現場に、それぞれの立場で携わっている3人に話題提供をしてもらい、実際の現場で生じている課題や考え方、それらが生まれてきた背景を参加者全員で共有すること、そして、これから現場に関わろうと考えている参加者が抱えている不安や疑問点などについて参加者全員で議論することを目的としておこなった。3人の演者の氏名、所属、タイトルは以下の通りである。1. 上田剛平さん(兵庫県農林水産部)「野生生物管理における現場での意思決定を円滑に進めるために…国内及び国外の事例より考える」、2. 安田章人(東京大学特別研究員)「アフリカにおける野生動物保全・管理について―スポートハンティングの現場から」、3. 水谷瑞希さん(福井県自然保護センター)「野生生物管理の現場における課題及びその背景―福井県の事例より」。3人の発表ののち、参加者全員で円卓形式の議論をおこなった。そこでは、兵庫、福井、そしてアフリカという各地でおこなっている野生生物保全の現場における課題の共通点と相違点を共有することができた。具体的には、獣害をはじめとした野生動物保全・管理における問題に、「地域」をどれだけコミットさせることができるのか、共通の課題として見えた

が、やはりその課題解決の道筋がほとんどみえていないアフリカの事例をはじめとして、各地の行政が進めるプロジェクトやその姿勢には大きな相違点がみられた。

本企画は、学部生から行政関係者に至る、いわゆる若手研究者・実践者とその卵に参集してもらい、それぞれが抱える研究および実践活動、そして進路における悩みを共有し、共助することができような学術的交流関係を築くことを大きな目的とした。そのため、合宿形式で、じっくりと時間をかけ、同じ年代あるいは立場の人々と学術的交流をすることができたことが、本企画の一番の成功であったと考える。しかし、だからこそ、30人弱という参加人数に物足り

なさを感じる。このような企画は、学部生をはじめとした新規学会員の獲得においても、非常に重要であると考え、特に非学会員に照準を合わせた、さらなる広報活動の拡充が今後の課題としてあげられる。今回の第4回Green Forum(GF4)も、同様の時期と場所でおこなうこととし、今後、本企画を定例化していくことを検討している。野生生物保護学会および青年部会の活性化に資する企画となるように、尽力する次第である。

